

# 平安京の祭礼と歴史災害

Traditional Festivals Held in the Heiankyo and Historical Disasters since the Heian Period, Kyoto, Japan

片平 博文 (立命館大学)

KATAHIRA Hirofumi (Ritsumeikan University)

This report analyzes the relation between festivals and disasters from the beginning of Heian period. The festivals held in the Heiankyo, such as the Inari, the Imamiya, the Gion, the Kitano and the Goryo festivals have been generically called the "Goryoe". Each festival was held in sequence from early summer to autumn every year. It was shown clearly that the five festivals were carried out exactly in accordance with the season of frequent disasters.

## I 災害関係の史料

『六国史』や公家の日記、寺社の記録、一部の文学作品などからは、歴史時代を通してさまざまな災害が、平安京以来の京都に発生した事実を知ることができる。これらの史料を基礎にして筆者は、これまで歴史時代における災害の復原を試みてきた<sup>1</sup>。また筆者らは、佐々木潤之介ほか<sup>2</sup>、外園豊基ほか<sup>3</sup>および『日本災異志』<sup>4</sup>などによって収集・抽出された災害関係の史料を手掛かりとして、平安時代初期から江戸時代末までの京都における災害のデータベースである「歴史災害年表」<sup>5</sup>を作成した。さらに、その内容を詳細に検討することによって、どの季節にどのような災害が発生したのか、それぞれの災害について発生時期の分析を行った<sup>6</sup>。その結果、突発的に発生する地震や火山噴火などを除くと、その他の災害の多くには、発生時期に明瞭な季節性の認められることが明らかとなった。

これらの災害に対して、歴史時代の人々がとった行動のほとんどは、旱魃・渇水時の祈雨や、洪水、霖雨、大雨時の止雨、さらには風害防止、疫病退散などを願っての神社への奉幣、宮中や神泉苑、寺院等での読経といったものに集約される。史料には、例えば賀茂川に関する寛弘元年(1004)3月10日の「防河水移東流」(『権記』<sup>7</sup>)や、寛仁4年(1020)8月3日の「以午剋始防河事官吏、…近江所當、河合社西、賀茂下社以南、堤百七十丈可築之、頃河口堤六十丈可築、同河百二十丈可」(『左経記])など、すでに平安時代中期において今日の土木工事に相当するような努力が払われた事実もうかがえる。しかし、洪水の被害はその後も治まることはなく、その実質的な効果はほとんどみられなかったというのが実態である。歴史時代の人々にとって、祈雨や止雨、疫病退散などの目的で寺社に願いをたてることは、当時における最大の「防災行動」なのであった。

本報告では、歴史時代に発生した季節性に関係の深い災害と、災害終息に向けての人々の願い、すなわち歴史時代における「防災行動」との関連について分析を試みたい。

## 2 歴史時代の災害とその特徴

「歴史災害年表」には、平安京（京都）とその郊外、または山城国に生じた災害が採用された。データの期間は、平安京が建都された平安時代の初期から江戸時代までであるが、実際には災害の発生が確認された延暦21年（802）から慶応元年（1865）までの記録が集められている。データの総数は4,486となったが、そのうち地震や火山噴火など季節とは明らかに関係がないと考えられるものを除き、かつ災害発生日までをも特定できるデータに限定した結果、2,954のデータが集計された。これらを詳細に分析することにより、データはさらに、「疫病」「火災」「洪水」「大雨」「虫害」「土砂災害」「風害」「冷害・雪害」「旱魃・渇水」の9災害（全2,558データ）と、これらを含むすべての災害に対する当時の人々の行動を反映していると考えられる「防災行動」（祈雨・止雨、風害防止、疫病退散のための奉幣、読経など、396データ）の計10項目に分類された。次に、すべてのデータは、現在の季節との対比を可能にするため、すべて新暦（グレゴリオ暦）に変換された。これらの手続きを経た後、各災害の発生数を1月上旬から12月下旬までの36期間に区分し、旬別に発生頻度をまとめたものが表1である。

表1 災害の旬別発生頻度と発生件数

	疫 病	火 災	洪 水	大 雨	虫 害	土 砂 災 害	風 害	冷 害	雪 害	旱 魃	渇 水	旬 別 合 計
1月上旬	2	17	2	0	0	0	3	2	3			29
1月中旬	3	17	4	0	0	0	1	1	1			26
1月下旬	1	21	3	0	0	0	0	2	0			27
2月上旬	6	10	6	0	0	0	3	1	2			28
2月中旬	11	20	1	0	0	0	1	1	2			36
2月下旬	5	14	0	1	0	0	0	2	1			23
3月上旬	6	24	3	0	0	0	2	2	1			38
3月中旬	7	27	2	1	0	0	2	3	0			42
3月下旬	9	23	4	0	0	0	2	0	1			39
4月上旬	7	26	6	1	0	0	1	3	7			51
4月中旬	7	17	5	2	0	0	2	5	0			38
4月下旬	8	22	3	0	0	0	1	6	10			50
5月上旬	9	13	6	2	0	0	1	9	12			52
5月中旬	6	19	10	2	1	1	1	9	8			57
5月下旬	18	29	8	2	0	0	6	9	10			82
6月上旬	26	12	17	2	0	0	6	8	15			86
6月中旬	29	9	22	4	0	0	3	6	35			108
6月下旬	28	11	59	3	0	0	3	5	39			148
7月上旬	17	9	71	5	0	0	7	3	34			146
7月中旬	20	12	37	4	1	0	6	4	46			130
7月下旬	18	13	34	3	0	0	8	1	84			161
8月上旬	16	15	33	2	0	0	3	2	98			169
8月中旬	17	9	22	2	2	0	10	4	61			127
8月下旬	10	18	32	4	1	1	10	5	55			136
9月上旬	13	7	51	4	5	0	13	1	27			121
9月中旬	13	15	63	3	0	0	11	2	11			118
9月下旬	11	13	68	4	3	0	19	1	7			126
10月上旬	7	11	34	2	0	0	23	0	4			81
10月中旬	3	9	22	1	2	0	12	1	6			56
10月下旬	8	13	14	0	2	0	3	4	5			49
11月上旬	4	18	8	2	0	0	2	0	2			36
11月中旬	9	11	3	0	0	0	1	2	4			30
11月下旬	3	10	4	1	0	0	3	4	0			25
12月上旬	1	18	3	1	0	0	1	1	4			29
12月中旬	4	16	8	0	0	0	1	0	1			30
12月下旬	8	15	2	1	0	0	1	0	1			28
合 計	370	563	670	59	17	2	172	109	596			2558

これら9種類の災害は、そのほとんどが個別に発生したものであるが、相互に関連性のあることが読み取れる。例えば「洪水」「大雨」については、あまりにもその時の降水が多かったために発生したものである。また季節は異なるが、「冷害・雪害」の「雪害」も、降雪量の多さによって発生するものである。「土砂災害」もまた、降水量と深く関係する災害といえる。さらに、気温の高い季節に長時間にわたって雨が降り、湿度の高い状態が長く続けば、一般に「疫病」の発生頻度が一気に高くなる。

反対に、長期間にわたって雨が降らない場合、大規模な河川の少ない京都では比較的短期間で水が不足し、地下水位も下がって「旱魃・渇水」の危険が一気に高まる。また、雨が降らずに湿

度の低い状態が長く続くと、今度は一般に「火災」発生の危険が高まってくる。気温が低く、乾燥した日々が続けば、風邪などの流行病が広がるきっかけとなる。さらに「虫害」の発生についても、夏から秋にかけての作物の成育・収穫時期と一致することから、降水量や気温と深い関係があるもの考えられる。

### 3 京都における災害の季節性

では、平安京以来の京都において、災害は一年の中のどの季節に多く発生したのだろうか。図1は、新暦に変換された表1のデータを旬別に区分し、かつ9種類の災害をその発生時期ごとにまとめたものである。これによって、一年の中でいつ、どれくらいの頻度で災害が発生したのかが判明する。

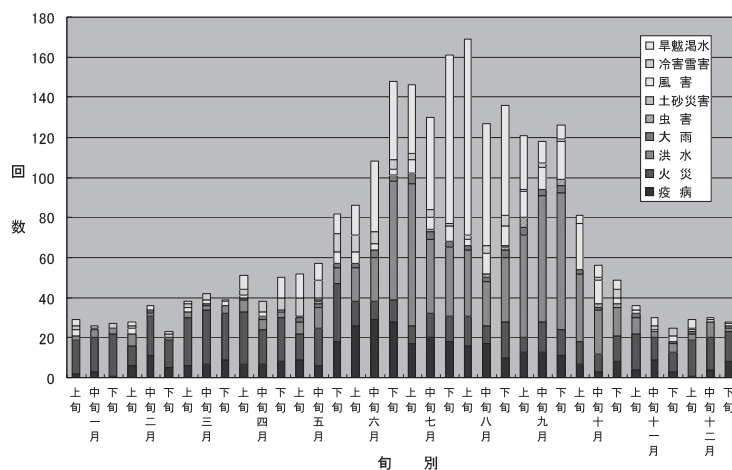


図1 旬別にみた災害の発生頻度

新暦の1月から4月にかけて、20回台から40回前後の間で推移してきた災害頻度は、5月に入ると徐々にその回数を増し、5月下旬には一気に82回にまで増えている。災害の頻度は6月になっても増え続け、同中旬には100回を超え、同下旬と7月上旬にはひとつのピークである148回と146回に達している。一年のうちで最も災害頻度が高くなるのは

7月下旬と8月上旬で、それぞれの回数は161回と169回となっている。100回を超える頻度の高い期間はその後9月下旬まで続き、夏前にその頻度が急激に上昇した5月中旬の水準にまで下がってくるのは、ようやく10月の中旬になってからである。このあと、頻度は徐々に低くなっていき、冬季に向かう11月から12月になると再び20～30回程度の回数に減少していく。こうしてみると、災害は夏季を中心とした季節に集中していることがわかる。ちなみに、災害発生頻度が高い水準を続ける5月下旬から10月上旬までの回数の合計は1939となり、実に全災害の68%が5カ月に満たないこの期間に集中していることが明らかとなる。

これらの災害に対して、祈雨・止雨、風害防止、疫病退散などを願っての神社への奉幣や寺院等での読経などに代表される「防災行動」は、いつ頃多く行われていたのだろうか。図2は、そうした「防災行動」の頻度について、一年間を同じく36に区分した新暦の旬別にみたものである。

図は、頻度が急激に高くなっていくのが5月下旬～6月上旬にかけてで、7月下旬～8月上旬に一年のピークを迎え、比較的頻度の高い状態が10月中旬～下旬まで続くことを示している。この傾向を図1の災害頻度と比較すると、両者の期間はほぼ一致しており、また増加・減少の推移もよく似ていることがわかる。すなわち、災害の頻度が高くなるのと同時期に、「防災行動」の頻度も高まっている。しかも両者のピークはともに7月下旬～8月上旬となって、見事に重なっている。ちなみに、5月下旬～10月下旬までの「防災行動」の回数は363回で、実に年間の91.7%がこの半年の期間に集中している。両者の比較から、政府主導による「防災行動」は、災害が多発する期間に応じて行われていたことが明らかである。

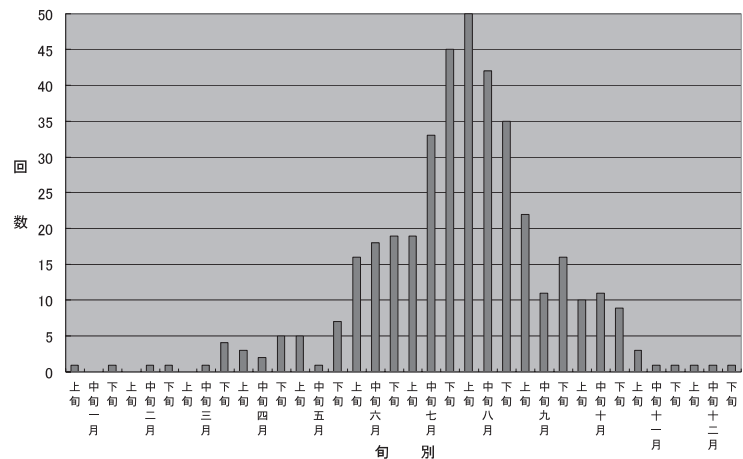


図2 旬別にみた「防災行動」の回数

#### 4 御霊信仰と平安京の祭礼

平安時代を中心に、先に述べた「歴史災害年表」の「防災行動」の項目をみると、奉幣使が遣わされる神社として、「丹生・貴布禰（丹貴）二社」「十六社」「二十一社」「二十二社」<sup>8</sup>等の記述がとくに9世紀の後半以降頻繁に出てくる。例えば、天禄2年（971）6月21日の「祈雨奉幣十六社、使々参議各申故障、賀茂使…、松尾使…、平野使…」(『日本紀略])、寛弘4年（1007）8月19日の「奉幣丹貴二社、依止雨也、藏人為使」(『同])、治安元年（1021）6月16日の「奉幣廿一社、依攘疾疫之難也」(『同])、長治元年（1104）7月6日の「有廿二社奉幣、…是依被祈甘雨也」(『中右記])などである。またこれ以外にも、例えば、延長5年（927）7月16日の「請七大寺僧於東大寺仏前、三个日、又延曆及有供諸寺、読経祈雨、雷雨」(『貞信公記])、嘉承元年（1106）7月6日の「今日於東寺孔雀経并御読経等被行、是依祈雨也」(『殿曆])、応和元年（961）6月25日の「於大極殿読経、依祈雨也」(『日本紀略])、永長元年（1096）7月9日の「藏人式部丞宗仲拂神泉池、晩頭甘雨下、靈験歎」(『中右記])などの記述がみられ、東大寺や延暦寺などの寺院、宮中、神泉苑などにおいても、祈雨・止雨など防災に対する願いをたてていたことがわかる。

実際に奉幣や読経などが実施された日までを特定できる396の事例をみると、そのほとんどす

べては朝廷、すなわち時の政府の主導によって行われていたことがわかる。厄災から逃れるためのこうした願いは、臨時に行われる公的な行事となっていたのである。ところが、こうした政府主導による「防災行動」と並行して、9世紀後半から10世紀・11世紀の初めにかけて、今度は平安京に住む民衆が主体となった祭礼や信仰が、疫病をはじめとする災害と結びついてさかんとなってくる。その典型例が、祇園御霊会に代表される御霊信仰である<sup>9</sup>。祇園社で行われる御霊会は、民衆に支えられながら、北野社や今宮社などにも広がっていく。

平安京城では11世紀の初頭までに、稲荷社（稲荷祭）、松尾社（松尾祭）、祇園社（祇園御霊会）、北野社（北野祭（北野御霊会））、今宮社（今宮祭（紫野御霊会））、上・下御霊社（御霊祭（出雲路御霊会））などで、神輿を平安京外の本社から京内にある御旅所に移して祭礼を行う御旅所祭祀が行われるようになった<sup>10</sup>。以下では、史料中に御霊会が実施されたという直接的な記録を持たない松尾祭を除く5つの祭礼を取り上げ、それらの実施時期と歴史時代の災害との関連を分析したい。

## 5 御霊会とその実施時期

松尾祭を除いて一年の最も早い時期に行われたのが、4月の稲荷祭である。稲荷祭が御霊会の性格を持っていたことを示す史料は、ただ『中右記』寛治8年（1094）4月9日の「今日稲荷御霊会也」とするものひとつだけであるが、祇園御霊会に極めて近似した祭礼の形式から<sup>11</sup>、稲荷祭もまた御霊会ないしは御霊会的な性格を持つ祭であったことは間違いない。この祭礼の起源については、諸説があって必ずしも明らかではないが<sup>12</sup>、長久元年（1040）4月の祭以降、4月第1ないしは第2の卯の日に開催されていく。

稲荷祭に続いて行われた祭礼は、正暦5年（994）6月27日の船岡山で実施された御霊会<sup>13</sup>や長保3年（1001）5月9日（『日本紀略』）、寛弘2年（1005）5月9日（『同』）、同5年（1008）5月9日（『同』）の紫野御霊会に起源を持つとされる5月の今宮祭である。「今宮祭」の記述は、紫野御霊会の記述と前後して、寛弘3年（1006）5月9日に初めて現れる（『同』）。以降、通常は5月9日とその祭礼日となって長く続くことになるが、その祭礼日のようすは『年中行事絵巻』にも描かれている<sup>14</sup>。また、紫野の今宮社とは別に、右京花園の今宮神社でも御霊会が行われ<sup>15</sup>、一時はにぎわいをみせたという。

今宮祭に続いて行われた6月における祇園社の御霊会が、いつから始まったかについては必ずしも定まっていないが、少なくとも「祇園御霊会」の記述がはじめて出現するのは、天延2年（974）6月14日のことである（『大日本史料』）。祇園御霊会はその後も頻繁に史料の中に現れ、

途中応仁文明の乱によって一時は中断を余儀なくされたものの、現在まで続く京都で最もよく知られた祭のひとつとなっている。

菅原道真を祭神とする北野社でも、8月のはじめに御霊会が行われるようになった。北野祭が初めて行われたのは永延元年（987）8月5日（『大日本史料』）であり、しばらくは8月5日に行われていたが、永承元年（1046）、この日が後冷泉天皇の母后である藤原嬉子の国忌にあたることで前日の4日に変更された<sup>16</sup>。これ以降、国忌が明けてからも4日に行われることがほとんどであった。しかし、北野社で御霊会が正確にいつ行われたかについては、史料があまり多くない。ただ、『左経記』長元元年（1028）8月3日には「依北野御会事、夜部一品宮令退出給云々、又宮属為信来触云、明日北野宮御霊会也」とあって、少なくともこの年には4日に御霊会が行われたことがわかる。ちなみに、この年の北野祭は8月5日に実施されている。また、『師遠年中行事』の「八月五日北野祭事」の項目には、「近例四日祭、五日御霊会」<sup>17</sup>とあることから、5日に行われていたこともあると考えられる。いずれにしても、北野祭とほぼ同じ4日ないしは5日に行われていたのであろう。

八所御霊を祀る上・下御霊社で御霊祭が行われたのも8月のことであった。御霊祭の記述は、『百練抄』建永元年（1206）8月に「御霊祭也、上皇中御門西洞院御棧敷有御見物」<sup>18</sup>とあるのが早い例といえるが、これ以前の長和5年（1015）8月にも「伝聞、今日出雲寺御霊会童部群鬪乱、童二人騎馬馳度枇杷殿東門云々」（『小右記』）の記述がみられる。この「出雲寺御霊会」とは現在の上御霊社を含む地域にかつてあった上出雲寺のこととされ、上御霊社はもと上出雲寺の鎮守社であった<sup>19</sup>。そうだとすれば、上御霊社の御霊祭も11世紀の初めには行われていたことになる。また、現在は京都御苑の南東部付近に位置する下御霊社も、かつては上御霊社に近い出雲郷にあったとされる。そのおおよその場所は、平安京北東部に近い一条大路の北、東京極大路末の西側と推定されている<sup>20</sup>。

## 6 祭礼の実施と災害の頻度

以上5つの祭礼をその実施順に並べると、4月第1（上）もしくは第2（中）卯の日の稲荷祭、5月9日の今宮祭、6月14日の祇園御霊会、8月4日もしくは5日の北野御霊会、8月18日の御霊祭となる。平安京の祭礼は、いずれも京外の本社から神輿を迎え入れ、それぞれ京内に設けられた御旅所に一定期間安置して人々の儀礼を受け、その後再び神輿が本社に戻るとというのが特徴である。このうち神輿を迎え入れる前者は神幸祭、また神輿が本社に戻る後者は還幸祭と呼ばれるが、このほうがむしろ祭の中心で、神幸祭よりもはるかに盛大に行われた。史料に残る祭の

記録も、そのほとんどが還幸祭のものである。

そこで、「東京大学史料編纂所データベース」<sup>21</sup>を主要な手がかりとして上記5つの祭礼に関する記録を検索し、さらに他史料から確認できた一部の記録を補填して一覧表を作成した。またこのデータのうち、平安時代から江戸時代直前までの史料を抜き出した。その結果、稲荷祭169、今宮祭102、祇園御霊会250、北野祭<sup>22</sup>136、御霊祭113の、計770に及ぶ祭礼実施のデータ（史料）が得られた<sup>23</sup>。さらに、祭礼の実施日をすべて新暦に変換して、先にみた災害データベースとの対応を可能にした。

図3は、新暦に変換された5つの祭礼の実施日を、それぞれの祭ごとに旬別の回数で表したものである。御霊会に関係の深い平安京以来の祭礼は稲荷祭から始まり、今宮祭、祇園御霊会、北野祭（北野御霊会）、御霊祭の順に実施されている。図中、例えば祇園御霊会のように、グラフの山が高く

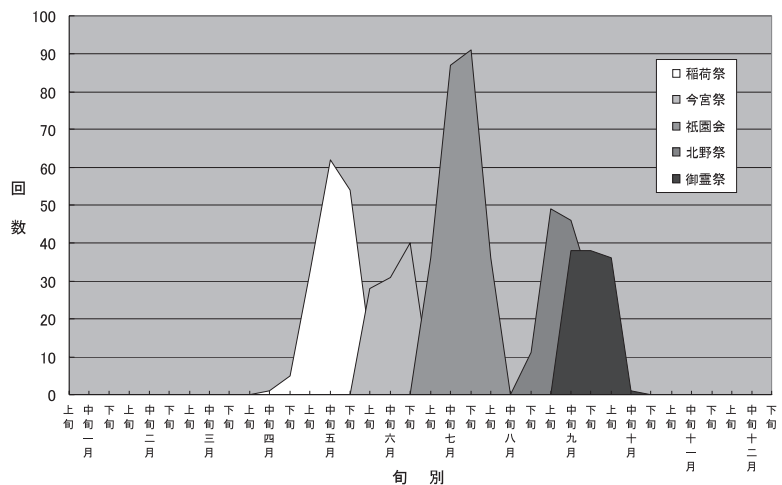


図3 御霊会に関係の深い祭礼の実施順序

なっているのはそれだけ史料数が多いことを示す。最初の稲荷祭は、新暦で5月中旬・下旬を中心とする4月中旬～6月中旬の期間に実施されている。続く今宮祭は6月中旬・下旬を中心とする6月上旬～7月上旬の期間、祇園御霊会は7月中旬・下旬を中心とする7月上旬～8月上旬の期間、北野祭は9月中旬・下旬を中心とする8月下旬～10月上旬の期間、そして御霊祭は9月中旬・下旬を中心とする9月中旬～10月中旬の期間に、それぞれ実施されていたことが明らかである。こうしてみると、平安京内で行われた御霊会に関係の深い祭礼は、新暦からみて相互の実施期間をずらせるかのように、順番に行われていたことがわかる。また、5つの祭礼をまとめてみると、その実施時期は4月中旬から10月中旬にかけてのちょうど半年に渡っていた。さらに、回数の集中している期間は、5月上旬から10月上旬の間であったことがわかる。

図3を、旬別の災害頻度を示した図1と比較すると、両者は深く関係していることが一目瞭然である。すなわち、5つの祭礼は、災害が多発する季節に応じて順番に行われていたといえる。例えば、稲荷祭が頻繁に行われた5月中旬・下旬は、まさに災害の頻度が急激に増加しはじめる直前の時期にあたる。同様に、6月中旬・下旬を中心に行われた今宮祭は梅雨期間中の災害多発期、また7月中旬・下旬を中心とした祇園御霊会は、ようやく梅雨が終わり、災害頻度が一年で最も高くなる7月下旬・8月上旬の盛夏の直前にそれぞれ実施されている。さらに、災害頻度の

なお高い状態が続く9月中旬・下旬には北野祭が行われている。そして、御霊祭が終わる頃になると、5月の下旬から頻繁に続いてきた災害も急激にその頻度が低くなる。

平安時代に始まり、現代にまで続く平安京内で行われてきた祭礼は、自然の中で生きぬいてきた歴史時代の人々の知恵と勇気と経験によって培われ、維持されてきたものなのである。

- 
- <sup>1</sup> 片平博文「賀茂川流域における洪水の痕跡」(立命館大学 COE 推進機構・立命館大学歴史都市防災研究センター編『文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点・平成 16 年度中間報告書』、2005、所収)。片平博文「平安京を襲った北からの洪水－平安時代の洪水復原－」、(立命館大学 COE 推進機構・立命館大学歴史都市防災研究センター編『21 世紀 COE プログラム:文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点・平成 17 年度報告書』、2006、所収)。片平博文「賀茂川東岸地域における洪水の痕跡」、立命館文学 593、2006 など。
  - <sup>2</sup> 佐々木潤之介ほか『日本中世後期・近世初期における飢餓と戦争の研究－史料所在調査と年表作成から－』、科学研究費研究成果報告書、2000、227 + 92 頁。
  - <sup>3</sup> 外園豊基ほか『日本中世における民衆の戦争と平和』、科学研究費研究成果報告書、2003、482 頁。
  - <sup>4</sup> 小鹿鳥果編『日本災異志』、地人書館、1967、874 頁。
  - <sup>5</sup> 赤石直美ほか「京都歴史災害年表」、京都歴史災害研究 6、2006、9～215 頁。
  - <sup>6</sup> 片平博文・吉越昭久ほか「京都における歴史災害の季節性」(立命館大学 COE 推進機構・立命館大学歴史都市防災研究センター『21 世紀 COE プログラム「文化遺産を核とした歴史都市の防災研級拠点」平成 17 年度報告書』)、2006、17～20 頁。片平博文・吉越昭久ほか「京都における歴史時代の災害とその季節性」、京都歴史災害研究 6、2006、1～8 頁。
  - <sup>7</sup> 同様の内容は、藤原道長によって書かれた『御堂関白記』の同年 3 月 10 日、同 12 日などの記述にもみられる。
  - <sup>8</sup> 平安時代の祭祀制については、岡田荘司『平安時代の国家と祭祀』、続群書類従完成会、1994、698 頁に詳しい。
  - <sup>9</sup> 柴田実編『御霊信仰』、雄山閣出版、1984、327 頁。村山修一『天神御霊信仰』、塙書房、1996、15～93 頁など。
  - <sup>10</sup> 岡田荘司、前掲 8)、440～499 頁。
  - <sup>11</sup> 林屋辰三郎「京都と稲荷社－御霊会としての稲荷祭－」、朱 10、1970、52～55 頁。岡田荘司「平安時代の稲荷祭と祇園御霊会」、朱 31、1987、47～53 頁。
  - <sup>12</sup> 関口 力「平安時代の稲荷祭と七条大路」、朱 35、1992、2～10 頁。
  - <sup>13</sup> 『日本紀略』正暦 5 年(994) 6 月 27 日条には、「為疫神修御霊会、木工療修理職造神輿二基、安置北野船岡上…」とあり、船岡山で御霊会が行われたことがわかる。
  - <sup>14</sup> 小松茂美編『年中行事絵巻 日本の絵巻 8』、中央公論社、1987、56～61 頁。
  - <sup>15</sup> 五島邦治『京都町共同体成立史の研究』、岩田書院、2004、89～116 頁。
  - <sup>16</sup> 『百練抄』永承元年(1046) 8 月 4 日条には、「北野祭、改五日為四日、依贈后御国忌也」とある。
  - <sup>17</sup> 『続群書類従』巻 251、公事部 4、205～236 頁。
  - <sup>18</sup> また、『明月記』の同年月日にも同様の記述がみられるが、ここでは「今日称御霊有辻祭、上辺雑々人日来結構、去十八日式日依迎延引、今日可渡御棧敷云々」とあり、本来の御霊祭開催日は 8 月 18 日であったことがわかる。
  - <sup>19</sup> 源城政好「上御霊神社・下御霊神社」(谷川健一編『日本の神々 第五巻山城・近江』)、白水社、1986、65～70 頁。
  - <sup>20</sup> 出雲路通次郎『下御霊神社誌』、下御霊神社、1907、11～15 頁。
  - <sup>21</sup> 「東京大学史料編纂所データベース」  
URL:<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller> による。
  - <sup>22</sup> 15 世紀以降、北野祭のみ実施日が 10 日間ほど遅くなるため、データは 14 世紀末までのものを用いた。また



北野社の御霊会については、8月4日ないしは5日に実施されたものと考えられる。しかしその具体的な日がわからないので、ここでは4日または5日の北野祭と逆の日を採った。ただし、本文中の表記については、「北野祭」と表現した。

<sup>23</sup> 本研究では、祭礼と災害発生の季節性との関係を見るのが主な目的であるため、「追行」となった年の祭礼については、本来の時期に行われたものではないため省略し、反対に「延期」「中止」となった年の祭礼については、仮に実施されていた場合には災害データとの対応が可能となるため、データに加えることにした。また、紫野御霊会は今宮祭に、出雲寺御霊会は御霊祭にそれぞれ含めた。

[付記] なお、本報告のさらに詳しい内容については、『朱』50号（伏見稲荷大社発行：2007年）に掲載されているので、合わせて参照していただければ幸いである。